

心の大学ノート

高校一年生と教師の 愛と苦悩を綴る交信

嶋田孝之・石井忠行／共著

朝日新聞社

嶋田孝之（しまだ・たかゆき）

大正七年茨城県石岡市に生る。

昭和十七年東北帝国大学法文学部卒。同年兵役徴集。二十三年茨城県立石岡農学校（後に石岡第一高校）教員となる。現在茨城県立保育専門学校長。現住所水戸市見和町桜川三丁目一二七番の一八〇

石井忠行（いしい・ただゆき）

昭和十二年東京都に生る。三十

年茨城県立石岡第一高校卒業、同年上京して日本電信電話公社へ入社。現在神田電話局営業課勤務。

現住所船橋市三山町五八八 三山

台マンション二一三〇一

心の大学ノート

四二〇円

発行日 昭和44年4月10日

著者 嶋田孝之

石井忠行

装幀 三原紘一

発行人 大田信男

印刷所 大日本印刷

発行所 朝日新聞社

東京・名古屋
大阪・北九州

心の大学ノート

目次

私は先生にすべてをお話します

私は働きたい……………29

お父さんが行きます……………33

常任委員に立候補します……………37

私は手を挙げません……………39

公約……………44

誇らかな気持……………46

秋深し伊勢の大路を引率す

暴行事件……………53

わたしの考え……………56

「人類の意志について」……………63

英文の文通……………65

空いっぱいのお星さんです……………68

修学旅行	71
約束はいつも頭にこびりついています	75
反省	78
約束は必ず守ります	
先生、ありがとう	83
君の論文	87
ホーム・ルーム長再任絶対反対	94
投書箱	98
フアイト	104
わたしの英語の勉強法	112
先生方は囲碁に夢中になり過ぎている	117
わたしはこう考える	120
私はありのままを書きます	128
弱い人間	135
結論	140

先生も私には懲りたでしょう……………146

輝かしい強情……………149

進歩のない私

新しいノート……………163

君に対する注文……………169

碁をやめて下さい……………175

安らかな夢……………180

先生と奥様とお子さんたち

優しい人々……………183

内職したお金……………187

「新聞配達員募集」……………192

君の身体は大丈夫か……………196

東大でもどこでも入れる……………199

単純な生活には意味がない……………202

五十一分三十五秒……………204

朝刊と夕刊と……………	206
かわいそうな先生……………	211
五百円の図書券……………	216
任意の角の三等分……………	220
運命がひとりで転がる……………	
大学の先生になって下さい……………	225
学究生活……………	227
破壊分子……………	232
無神経なわたし……………	235
井の中の蛙……………	241
弟か子供のような気がする……………	
お金が入っている……………	245
インキがこぼれている……………	249
本当の勉強……………	255
甘い計画……………	258

ノートはさびしがつているよ

ひとに迷惑をかけるのなら両親にかけます……………261

自分の生涯の大問題……………274

気の毒な利根君……………280

今までをふりかえってみよう……………283

あとがき・心の故郷……………石井忠行……………287

あとがき・踏みしめた道……………嶋田孝之……………301

まえがき

対話の周辺

昭和十七年九月、私は繰上げ卒業で大学を卒業した。同年十月、現役徴集令状が来て、宇都宮の野砲隊に入隊、そこで初年兵教育を受け、のち経理部見習士官に任官した。

昭和二十年九月に復員したが、入隊前に就職して籍のあった会社はアメリカ軍の進駐と同時に吸収され、翌月会社は解散し私は職を失った。

しばらく生家に戻つての農作業従事、石油会社への就職、同郷の女性との結婚とつづき、二十三年、地元の石岡農学校で教鞭をとることになった。この学校は後石岡高等学校と改称し、ついで普通科の増設とともに石岡第一高等学校となった。私は学校では定時制要員で、担当科目は一般社会と英語であった。

当時は旧制度から新制度にうつりかわる、いわゆる学制改革の初年度で、定められた教科書もなく、われわれ教員は、敗戦後の虚脱状態と新しい学校制度の発足の中で、右往左往していた。その上に経済生活の逼迫と食糧危機がわれわれの生活を脅かした。

私はこういう生活の中で、教師をしながら学生時代の夢であった司法試験合格を目ざして勉強した。しか

し、生活に追われながらの受験勉強と教師の仕事は私には両立できなくなった。私は情ないおもいで妻に自分の気持ちを告げ、司法官の夢の実現をあきらめることにした。

私はむかしを思い、今を思いわずらうとき、教師の生活が自分には向いているのではなからうか、と自分自身に言いきかせている私に気がついた。

新米教師誕生

教師になって、毎日兵隊服を着て学校に通った。栄養失調のような顔色のわるい、首の細い生徒たちが、教室の机にちょこんと生気なく座っていた。

私は定時制普通科一年の組主任を命ぜられた。

生れてはじめて教壇に立った私は落着かなかった。何度も教壇に上ったり、下りたりした。受持の一般社会と英語には教科書がなかった。しばらく経つと出来てくるだろうとのことであった。

英語はどういうふうに教えようか、と考えた。むかし、中学時代に英語を教わったときのことか思い出された。先ず発音記号からはじめようと思った。その当時の教科書や参考書やノートをさがし出してきた。それらをひっくり返していると、少年時代のことか甦^{よみがえ}ってきた。

ていねいに発音記号の文字を黒板に書いた。その説明もチョークをつかてきれいに板書した。生徒たちはワラ紙の薄い帳面に一生懸命黒板の字を写した。私が大きな口を開けて発音をすると、生徒たちがそれを真似して発音の練習をする。

よく勉強をする子供たちであった。私もよく準備して授業に出た。

社会の授業はどういうようにやろうかと考えた。英語の授業にくらべると社会の方はてこずった。とにかくはじめて黒板を背にして教師となった私は、一般社会の授業のまともには手を焼いた。教科書もなければ参考書もない。漠然と頭の中にえがかれた構想をまとめて、生徒たちに話をしようということになると、自信が持てなくなる。

学生時代に読んだいろいろの本を持ち出してきて読んでみたが、終戦前と後との日本と世界の情勢はすっかり変ってしまっているのです、それらの本の中からぬき出してきて話をしようとして考えてみても、それは今の時勢とはかけ離れたことであつたり、無縁のことであつたり、時勢にそぐわないものであつたりで、とても利用できそうもない。ただ、社会思想というか、社会主義、共産主義の思想については、むかし書かれたものでも、現在と密接に結びついた理論のように思えた。しかし、それらについては私には積み上げた勉強の経験がないので、ダイジェスト的なにわか仕立をするほかなかった。

やはり、私がかつて読み集めた本の中で、生徒たちに話をして面白そうに思えたのは、哲学者や社会思想家や学者、それから作家や文学者などの書いたものや随筆などで、話してみても、決して時代ばなれしたもののばかりでなく、十分理解もでき、また興味深いものがありそうに思えた。私は、和辻哲郎や阿部次郎、安倍能成、河合栄治郎、天野貞祐、小泉信三などの古い本を持ち出してきては一生懸命に読んで、ノートにダイジェストした。ことに、寺田寅彦全集は授業ごとに利用した。

社会の授業に出るのは楽しみだった。話の材料はたくさん仕込んであるが、それを表現する方法が私はまことに未熟であつた。人前でしゃべったことは、むかし大学で商法のゼミナールとき、用意していたノートをしながら仲間の学生たちに説明し、質問をされると立往生をして教授に援けてもらったこと、また、兵

隊時代に、兵隊たちを集めてきまりきった訓話をしたり、気合をかけたらしきくらい経験しかない。私は小さい生徒たちの前でもまとまった話をするということは、決して楽なことではなかった。それでも生徒たちの前に立つと、懸念していた心配も消えて話ができるようになったが、用意してきたノートに書かれたことを生徒たちに伝えるには話もとぎれがちで、理路整然と説明していくとしても、途中で不安になってしまふこともあった。

当時の生徒たち

それに、意気込んでしゃべってみても、よくきいてくれる生徒ばかりもいなかった。中にはあくびをするもの、居眠りするもの、落着かないように体を動かしてばかりいるものなどを見ると、勝手に用意した原稿を中心に話をして無理なんだな、と思いついて返してみるようにもなった。

ときどき余談をまじえたり、生徒たちの希望にしたがって、私の戦争体験談を話したりすると、生徒たちは生気をとりもどし、眼を輝やかして私の話の話を傾けた。

それにしても、私の担任したクラスは、そろってよく勉強をする子供たちで、教師一年生の私にとっては得がたい勉強の機会を持つことができた。

あとで、そのクラスの生徒たちが集ったとき「あのころの先生の授業はよかったなあ。とにかく迫力があって充実しており、先生の勉強のほどがよくわかった。あのころを思い出すと、高校時代が無性に懐しくなる。それに、先生はちっとも変っていない。若いですね」と、背広を着た、当時の教え子たちがいろいろを聞いた。私としても当時無我夢中でやっていたことを、生徒の方ではそう受けとめていてくれたか、生活も授

業も苦しかったが。まあまあよかったと、当時を思いかえしてみるのであった。

翌年は持上がりだった。生徒たちは相かわらずよく勉強するし、面倒な頭を悩ますような問題が一つも起きなかったことは、組主任としてはありがたいことであつた。毎日の学校の生活は平安に過ぎ去っているような気がした。

その次の年は、新しく入学した定時制農学科の組主任となつた。非常に学力が低く、英語などは授業にならなかつた。中学一年の英語のテキストを使つてみても、それについて来れるものは寥々たるものであつた。社会の授業にしても、教科書をていねいに読んできかせることが精一杯で、いろいろ準備してあるノートを中心に話をして、生徒たちは反応を示さず、全然ついて来ない。どうしようもないのである。中にはよく勉強してくるものもあつたが、そういう生徒には気の毒でも、クラス全体の生徒に合せて進度をゆるめるよりほか方法がなかつた。

生徒たちはよく私の兵隊時代の話をしてくれとせがんだ。楽しい思い出話ではなく、ひどい負け戦のことや、はじめな初年兵時代の話ばかりで、私にはそうした思い出しかなかったのである。ところが、生徒たちはそういう話でも喜んだ。こういうひどい、はじめな話しかきかされない生徒たちは、大きくなってどんな大人になるのだろうかという心配が頭をかすめた。

授業を真面目に始めようとすると、生徒たちは気のない顔になつてしまふ。おだてたり、すかしたりして授業を進めることは決して楽な仕事ではなかつた。高校生といつても、それは名ばかりじゃないかと、憤懣やる方もなかつたが、その憤懣のやり場がなかつた。

しかし、生徒たちは、勉強こそあまり好かないが、純朴ないい子供たちであつた。むずかしい英語の文法

などをやかましく指導するよりも、彼らのいい遊び相手、話相手になってやった方が、彼らのためになるのではないかと、思いあきらめることが何回もあった。

中に、ひどい生徒がいた。こんなことでよく学校に入れたものだ、と思うような子供がいた。その子供を学校に入れた親たちは大きな間違いをしているのではないかと、私はよく考えたものだった。どうしようもない、救いようがないのである。

私は授業のときその子供の方を向かないことにした。可哀そうで見えていられないのである。その子供は、全く笑いもしなければ、つまらなそうな顔もしない。ただ、無表情な、白っぽい顔がそこにあるきりである。その翌年のクラスの担任について、私は、全日制の普通科の方へ変えてほしいむね、校長に頼んでみたが、その年も、定時制普通科一年の組担任にさせられた。

昭和二十三年にこの学校の教員として採用になったとき、私は定時制要員として採用されたので、職員名簿には、私の名前のところにいつも定時制と書いてあった。定時制は、全日制とちがって四年間かかって高校の課程を修了することになっていた。働きながらでも高校が卒業できるということが、この制度の設けられた大きな理由であった。

ところが、実際に入学してくるものは、そういう勤労青年はほとんどいなかった。つまり、全日制に入学しなかったのだが、それだけの学力がなかったので、定時制に入ってきたのだという生徒がこの学校では大部分のように見受けられた。それに、定時制とはいっても、全日制と授業形態は全く異なることなく、全日制は週日毎日登校するが、定時制は週に四日登校するということになっていた。休暇が全日制と比べ少々長かった。だから働きながら学ぶことができるという文句にはあっても、実態はそうではなかった。さらに農

業科は普通科に比べ学力が劣っていた。

私は何とかして、そういう定時制の枠からはずされて全日制担当の教師になりたいと思った。できることなら、普通科担当になりたいと思ったが、この希望は校長にかなえてもらえなかった。

私が校長にうけがよくない理由は、確かにあった。当時、同僚で刑事問題を起して休職中の先生の原稿を、私が編集していた職員雑誌の「青丘瑣論」に載せてしまったことが原因している。原稿はその職員がまだ刑事問題を起す前に、すでに寄稿されていたものである。

職員雑誌が印刷されて出来てきたので校長のところへ持って行ったところ、私は校長に大声で叱責された。そうでなくても、舌がもつれるようなはっきりしない発音の校長は、わけのわからぬ口調で何度も私を怒鳴った。私も、これはしまった！ と思ったが、すでに遅かった。

私は刑事問題を起した同僚教員の心情を思うと、校長の叱責が何としても非情に過ぎると思った。その同僚は、教師として声望も高く、熱心な教育者であったし、すでに寄稿になっていたものを不用意に雑誌に載せてしまったのである。その間の事情を一応説明しておきたいと思って、校長に対して語りかけようとする、と、再度、一喝された。私は、その同僚が気の毒になると同時に、校長の心情もあわれに思われたので、思わず落涙してしまった。校長は青い顔をさらに青くして、体をふるわせ、大声をあげた。

「青丘瑣論」は、職員雑誌とはいっても、プライベートなものであって、学校の教育活動に関係したことでなくても、職員は自由に寄稿することができ、懇親を深めることをねらいとした気軽な雑誌であり、随筆・詩・小説・論文・雑筆なんでも寄稿歓迎ということであった。校長も、そういうことなら、PTAの方から何がしか出してもらってもいいと、幾分補助をしてもらっていた。

ところが、こういうことで、私が校長に叱られてから、その方へ予算の支出をしてもらえなくなり、とうとう三号で廃刊になってしまった。私はそれ以来、校長のおぼえがめでたくなっていた。

それはともかくとして、生徒たちに何のともないのに、定時制から全日制へうつしてもらいたいなどと考えては、生徒たちに悪いと思って、学校の方にお願ひするの思いとどまりはしたが、もうこれをつとめあげれば、定時制の担任として四年もつとめることになるのだから、その翌年は全日制へまわしてもらいたいものだ、心から望むようになっていた。

私のそれまでの経験では、教員になって最初に担任したクラスは別として、定時制の生徒たちは普通科でも農業科でも、勉強の意欲のない者が多く、授業をしていても張合いがなかった。教材研究を念入りにやっても、生徒の方ではそれを受けとめてくれないので、丹念に準備をしていく必要もなかった。それよりも、その一時間をいかに飽きさせないようにして放課のベルが鳴るまで面倒を見るか、ということが私の最大関心事であった。こういうときに教師は往々にして不勉強になり、墮落するのではないかと私は思った。

定時制の子供たちが、学校へ来てぼんやりしているかわりに、その家庭の父親たちは熱心であった。定時制の子供の父親たちは、よく私の家まで見えた。「せがれがお世話になっております」と門口であいさつして、かます一杯の柿を自転車に積んで持ってきてくれたり、梨なしができたといつては、籠かごいっぱい梨を置いてゆき、自分の子供たちの将来を案じていろいろ話し合つて行つた。

全日制に移る